

中学校 社会科のしおり

2018年度 **1** 学期号



スリランカ 紅茶農園での茶つみのようす (取材レポートは裏表紙)



注目
記事

どうなる？新学習指導要領 第1回

- 社会科はこう変わる **歴史**
- キーワード解説「社会に開かれた教育課程」

教授用資料

帝国書院

帝国書院撮影の
写真はこちらから!!



産業・文化からみるスリランカの現在

帝国書院取材班

品質だけでなく、従業員の生活も大切にする紅茶農園

スリランカといえば、紅茶“セイロンティー”が有名である。表紙写真のように、山の斜面につくられた茶畑で茶つみをする女性たちの姿は、現地ではおなじみの光景だ。つんだ茶葉は、農園に併設した工場で製造・出荷される（写真①）。茶葉の乾燥から発酵までを分刻みのスケジュールで行い、厳しい品質チェックを経て、香りと味わい豊かな紅茶が完成する（表紙写真下）。今回取材したスリランカ南部に位置するヌワラエリヤのペドロ農園では、約10種類の紅茶を製造し、世界でも広く親しまれている。ちなみに、この農園の紅茶を世界で一番たしなんでいるのは日本である。

工場の周辺には、従業員とその家族の住居や、彼らが利用できる病院、行政代行センター、保育所（写真②）、小学校などがある。これらの施設は、わざわざ街に向かなくても済むように、すべて農園の敷地内にある。スリランカがイギリスの植民地だった時代は、現在のように従業員たちが不自由なく生活できる環境は考えられなかった。完全に独立した1972年以降、労働組合や農園出身の政治家などの地道なはたらきかけにより、現在の生活が確立されたのだ。

ブッダの遺物を守り続けるスリランカの人々

スリランカ仏教の聖地の1つとされているのが、世界遺産の町・キャンディの仏歯寺だ（写真③）。4世紀ごろにインドから決死の覚悟で持ち出されたブッダの歯がまつてある。寺院内にある美しい絵画や壁画には、仏歯が今の場所に収まるまでの波乱万丈な経緯が示されている。それらからは、ブッダの遺物をなんとかスリランカに残したいという、当時の人々の熱い気持ちが伝わってくる。その気持ちは現在にも引き継がれており、1日3回ある礼拝の時には、仏歯がまつられた部屋の前には多くの参拝者が押し寄せ、熱心に祈りをささげている（写真④）。

街中でよく見かける西洋風のパン屋

キャンディの繁華街では、おしゃれな外観のパン屋を多く見かけた（写真⑤）。ショーケースには、ドーナツや惣菜パンなどが豊富に並ぶ（写真⑥）。また、名物である米粉とココナッツミルクでつくったお椀型クレープのような“ホッパー”（写真⑦）もたくさん売られていた。

スリランカ人は毎日カレーを食べるとのことだが、イギリスの植民地時代にパン食文化が広まって以来、とくに夕食では米よりもパンのほうが好まれているようだ。パンの原材料である小麦粉は、ほぼすべてアメリカ合衆国からの輸入にたよっている。（写真：帝国書院 2017年9月撮影）

